企画特集　多様性を考える

多様な時代の学びのカタチ（学校教育の現場）

ユナイテッド・ワールド・カレッジ ISAK ジャパン

■ユナイテッド・ワールド・カレッジ ISAK ジャパン
■ 軽井沢町
■ 2014 年開校
■ 生徒数 195 人
■ 84 の国と地域から生徒が集まってきている

人類が、次の選択肢を模索する事態になったコロナと共存する社会。日本人の常識やこれまでの社会の常道にとらわれず、より強く“自分を持つ”チカラを子どもから引き出す教育の現場が台頭してきたと思う。個性を尊重し、自分の持つ宝を信じさせて探る教育。新しい取り組みをする学びの場が、ここ数年で長野県に 3 校開校した。そのうちの 1 校、ユナイテッド・ワールド・カレッジ ISAK ジャパンに話を聞いた。

ユナイテッド・ワールド・カレッジ ISAK ジャパン（以下 UWC ISAK）は多様な個性が集まり、1 つに結ばれたコミュニティーである。選りすぐりの教員陣に加え、様々な分野でグローバルな経験を積んだスタッフが学校運営を支えている。

全寮制なので、町で暮らす生徒たちは地域にも密着している。美術館

や公共施設等で関係者とディスカッションをする様子を時に見かける。町主催のマラソン大会では、ボランティア活動にも積極的に参加する。こうしたリーダーシップのとれる人材育成を掲げながら、建学の精神である世界に通用する『チェンジメーカーの育成』を目指すのが UWC ISAK だ。

「一度しかない人生。自分の個性を生かして思い切り生き、自らの立つ場所から世界を変える。」を信条に教育現場は熱を帯びている。

コロナで知った、世界と繋がるときの物理的な壁

海外からの生徒たちは、コロナの影響で 3 月中に一旦帰国し、その後オンライン授業に移行した。しかしコロナをめぐる状況は改善せず、8 月になるまで海外の生徒たちは再入国ができないでいた。さらに、新入生は新規の留学ビザ発給が停止した影響で、年度始めの 9 月になっても入国できない状態が続いた。10 月 1 日に新規入国者の受け入れが再開されたことで、キャンパスには希望が広がっている。

国際社会においては、時差すら感じさせないほどグローバル化が進んだ昨今、コロナのような疫病がもたらす見えない壁が、交流の術を阻むことになろうとは想像できなかったに違いない。全寮制である当校の代表理事・小林りん氏は「生徒たちが寝食を共にしながら学び合うということができない事態に、どうするかを考える毎日だった」と語った。当校は 4 月以降全面的にオンライン授業を採用した。しかし本来ならば、生徒たちは多様な価値観の中に身を置き、様々な生徒と共に関わり合うことで、多くの学びを得るものである。今回のようなケースに現場はどう対処していくかが、今後の課題ともいえる。教育は、今しかない時間と向き合う場であるのだから。

文化・芸術への取り組み

多様な文化を持つ生徒が集まる当校の芸術への取り組みを紹介しよう。

当校では、生徒が主導する様々なクラブ活動がある。海外から来ている生徒たちは、やはり日本文化に興味を持っていて、キモノや茶道などに人気があるようだ。芸術面にも多様性が映し出されるのか、自画像を描くテーマにおいて、例えばイスラム圏の生徒は、宗教による禁忌もあるため自画像は描かない。絵を描く行為ひとつから、個々人の宗教や慣習を尊重することも学んでいる。このほか、町内にある「千住博美術館」ギャラリーで毎年秋に美術作品の作品展も開催している。

※写真では生徒がマスクをしていませんが、これは昨年の画像です。

― この人に逢いたい ―

浅間山麓にヨットのある風景

■ 佐野末四郎

マホガニー製自転車で、自転車愛好家を驚かせた知る人ぞ知る佐野末四郎さんが、軽井沢に居る。江戸時代から続く造船所の三男として東京に生まれ、13 歳で父から船体設計を伝授。14 歳で 9 フィートのディンギー（小型の競走用ヨット）を製作、15 歳のとき外洋ヨット（ケッチ）の建造に着手後、3 年かけて独力で完成させた。「プリティエンジェル」と命名したこの船、米国の木造船専門誌「Wooden Boat」に日本の木造船として初めて紹介された。

佐野さんは幼少から器用な子供だった。しかし、いくら器用な子供

でも、木造船を一人で造ってしまうというのは並みはずれている。頑固で負けず嫌いな江戸っ子気質の典型のような人で、波乱万丈な人生を送ってきたと本人は語るが、のめり込み、頑張った結果が今をつくっているのは間違いない。

2 年前、北軽井沢へ向かう千ヶ滝にアトリエと工房を構えた。木造船つくりから身を引き、悶々と暮らした時期に、自転車を造った。自転車レースに参戦する知人に依頼され造ると、たちまち話題になり今はマホガニー製の自転車とスピーカーを注文に応じて造る。

工房にある素晴らしいマホガニー製スピーカーからは、セリーヌ・ディオンの神の歌声が響き渡っていた。でも、そこかしこに細かい木の粉が降り注いでいる。『削っていると飛ぶんです。仕方ないよね』と呟く佐野さんにこちらも苦笑いした。

アトリエには、製作した 1/2 サイズのグランドピアノ、子どもが使った勉強机、書棚といった美しい色に変化したマホガニーの製作品が鎮座している。それぞれに深い思い出を纏い、誇らしげに存在を示していた。

佐野さんの武勇伝や苦い経験は、裏で支え続けた家族の愛情なしでは語れないものがある。しかしながら、全ては佐野さんの持っている技術の高さを信じて皆で支えたきた証しだと感じる。

せっかく軽井沢に来てくれたのだから、一人でも多くの“佐野さん推し”を発掘したいと、これを書きながら思うのである。

Profile：1958 年東京生まれ。工学院大学造船科卒。1984 年進水の１０メートル級スクーナー「サクセッサー」（「継承者」の意）で再び Wooden Boat 誌に特集されて賞賛を浴び、"SANO MAGIC" と称される。現在の工房名。

編集後記

■2020 年は、思わぬ事態の勃発に社会生活が一変した。芸術文化も多大なダメージを受けた。そこに身を置き中には暗闇を見た人もいるのだろう。■美術館の情報をもっと掲載したかったが、スペースが取れなかったことが悔やまれる。■特に志賀高原ロマン美術館で開催中のナカムラジンさんの展覧会情報は載せたかった。（11 月 29 日まで開催）■今回も多くの皆さんに協力いただいて漸く発行にこぎつけた。特にオンラインシンポジウムでは、吉田達矢さん、樺嶋賢慈さん、深澤大地さんには多大なご尽力を賜った。この場を借りて御礼申し上げます。（嶋崎）

発行：国際文化都市整備機構（FIACS）東京都港区南青山 3-1-3 スプライン青山東急ビル 4 階　㈱エナジーラボ内　　編集人：嶋崎 由紀子　デザイン：鈴木 一史

カルイザワ芸術新聞
2020
第 3 号

コロナウイルス以降の軽井沢の新しい日常を展望する

著名アーティストらによるシンポジウム開催！

国難から いかに立ち上がるか

中国武漢から拡散した新型コロナウイルスは世界中に膨大な感染者と死者を出し、人々の生活を混乱させた。この閉塞状況において、軽井沢の芸術文化に関わる人たちは何をし、何を考えているのか。また芸術文化は軽井沢という地に何をもたらすのか。それらのテーマを掘り下げるシンポジウムが、9 月 12 日（土）に軽井沢友愛山荘にて開催された。

主催は国際文化都市整備機構(FIACS)。軽井沢に別荘を持つ企業人・文化人が中心となって、国際的な視野で首都圏と繋がりのある各地のまちづくりに貢献する目的で設立した非営利団体だ。毎年夏には軽井沢友愛山荘にて調査研究成果の報告会やシンポジウム、さらには地元の方々を招いての懇親会・交流会を実施してきた。

オンラインと ドローンの活用

長野県でも感染者が連日のごとく報告され様々な集会が自粛となった。しかしこうした時こそ芸術文化の果たせる役割について語り合うことが重要と考え、初のオンライン開催となった。シンポジウム後に友愛山荘の広大な芝生の庭で懇談できるのが魅力であったが、今回はそれをドローンによる上空からの映像で補い、視聴者に軽井沢の自然を楽しんでもらうとの工夫がなされた。

コロナ下で蓄積される芸術家のエネルギー

水野誠一 FIACS 理事長（元西武百貨店社長、元参議院議員）の主催者挨拶後、最初に軽井沢の緑や音楽を守る身近な活動を展開中の加藤正文氏（愛宕山のてっぺんを守る会）と小嶋洋一郎氏（プロジャズギタリスト）からコロナ下の活動状況について報告があった。

次に軽井沢の美術関係に詳しい深澤大地氏（ギャラリー経営）から、軽井沢の世界的アーティスト 2 人が紹介される。米国生まれで軽井沢在住のデビット・スタンリー・ヒューエット氏（2 面で紹介）は、陶芸や平面作品を中心に日本国内はもちろん世界中で個展や展覧会を開いている。金箔を施した作品からは、米国人とは思えない繊細な美しさがうかがえる。一方、ビビットな色彩で犬を描く魔術師とも言われ、NY との繋がりの深いタムラエイジ氏（2 面で紹介）からも「自粛解除後には爆発的な熱量で芸術活動を展開できそう」との前向きなコメントが寄せられた。

ペスト対策がルネサンスとその後の発展を支えた

続いて登壇した團紀彦 FIACS 理事（青山学院大学教授、建築家）は、今回のコロナを 14 世紀に大流行したペストに例えた。フィレンツェのポンテ・ベッキオは川の両岸にあったメディチ家の執務用宮殿と住居用宮殿とを結ぶ橋である。橋の中に肉屋があり、肉屋は捌いた肉を川で洗っていたことでペストのさらなる感染が危惧された。そこでメディチ家は独自に橋の上部に回廊を造ったのだが、この回廊には美術品が展示され、今や回廊美術館として有名だ。それらペスト対策が残したものが欧州各地でも散見され、ルネサンスの興隆と人々の立ち直りに寄与することになったという。ちなみにセゾン現代美術館の理事も兼務する團氏は、軽井沢の美術館全体の停滞感や閉塞感についても深く憂慮している。キュレーターとして企画開催中の「都市は自然」展では、屋外オープンエアに展開した茶席（胡坐茶席）を通して、コロナ状況（新しい日常）に適合した新しい展示スタイルにもチャレンジしたとのこと。

《胡坐茶席》

長野県から世界に羽ばたいたアーティストの想い

ここで、長野県坂城町出身で狛犬の作品が大英博物館に永久所蔵されたアーティスト小松美羽氏がリアルでシンポジウムに参戦。オンライン上では、まず広島爆心地至近の護国神社で奇跡的に残った狛犬を訪ねた際の小松氏のニュース映像が紹介された。魂や心のありようを神獣や狛犬で表現する小松氏は、自らの作品を「閉塞状況でダメージは心に来る。狛犬は悪いものを取り外し、人々を守る存在であり、それは人と人とを繋げることにも通じる」と語った。

国難打開にはアーティストの突破力が必要

團氏と小松氏の話題提供を受け、井口典夫 FIACS 専務理事（青山学院大学教授、都市プロデューサー）がモデレーターとして加わり、以後は 3 人のトークとなる。團氏から質問された小松氏は「毎朝瞑想します。描くのも瞑想。ある意味、私は描かされている」と回答。さらにコロナとの関係について問われた小松氏は「困難な状況では衣食住が必要。加えて薬の役割でアートがあると思っている」と答えた。

前段の「コロナ下で蓄積される芸術家のエネルギー」に関するやり取りや、小松氏の発言を受け、井口氏は「芸術家は戦争や疫病の絶望にいる人々を見て溜め込んだエネルギーを爆発させ、ピカソのゲルニカや丸木夫妻の原爆絵図、さらには岡本太郎の明日の神話など考えもしないような作品を生み出し、人々はそれを見て国難から立ち上がる力を得た。平時なら政治経済や科学で引っ張れるが、国難においては芸術文化にこそ、その力があるのでは」と続けた。團氏は「コロナは人々の精神世界に多大な影響を与えた。政治経済で世界に繋がる街は東京だが、精神世界では軽井沢も大きい」と語る。小松氏は「軽井沢は長野県でも特別な場所」と締めくくった。

軽井沢の新しい日常に想う

最後、鳩山由紀夫 FIACS 会長（元内閣総理大臣）より「友愛は自立と共生が基本。コロナと共生する際に芸術文化が重要であり、ふさわしい場所が軽井沢であるとの認識を深めた」との挨拶あり。ここで受けた新たな刺激と感覚を参考に、これからの軽井沢の新しい日常についてじっくり考えてみたいと思ったシンポジウムだった。〈嶋崎由紀子〉

軽井沢書店

〒389-0102　長野県北佐久郡軽井沢町軽井沢 1323
営業時間：9:00 ～ 21:00（水曜定休）※季節変動あり
書店：0267-41-1331 / カフェ：0267-41-0344

特集“この時代”生き方の変化
シンポジウム参加から
芸術・文化に携わる人たちの 2020

デビット・スタンリー・ヒューエット

アメリカ出身の芸術家ヒューエットさんは、幼少から空手を習い日本に興味を抱いていた。14 歳で本格的に陶芸を学び、大学時代のある日、アメリカで個展開催されていた日本陶芸の作風に強く惹かれ、大学卒業と共に来日。銀行員と芸術家という日本での " 二足の草鞋 " 生活は 20 年を越えた。

陶芸、絵画、そして屏風と様々な作品を手掛け、海外での個展も数多くこなす彼の作品には、東京の著名なホテル などでも出会える。今年、対外的な活動を縮小せざるを得なかったことについて、「時間を有効に使うべく、対外的な活動の多くはデジタルに移行し、後は、作品作りに専念しています。一日に 10 数時間を費やす日も多い」と語り、コロナ収束時、創作活動に費やした時間が活きてくるとの信念をのぞかせてくれた。アメリカ人現代芸術家という立場で日本芸術・美術に敬意を抱き多大なる影響を受けた彼の作品の多くには、その技法が垣間見える。

中軽井沢に構えるスタジオは、不定期ではあるがオープン時には作品を観ることができる。

Profile：1967 年アメリカオハイオ州生まれ。マサチューセッツ大学卒。国家間贈呈品（日本／米国）となった「MAJIME」を始め「BUSHIDO」シリーズ作品のほか、企業コラボレーションでワイングラスなども制作している。
https://hewett.jp/ja/

渡辺万里

講義や執筆、講演などを通して、スペイン食文化の啓蒙活動を行っている渡辺さんは軽井沢の食文化には欠かせない人財だ。美食の歴史がある軽井沢と、豊かな食のひろがりをもつ信州をアピールし発展させるためのイベントを、軽井沢を拠点として数多く開催している。

軽井沢は子供のころから親と滞在する機会に恵まれ、第二の故郷との思いが強い。この縁ある地を、自分にできる形で支援したいと話す。「アウトレットのために訪れる軽井沢ではなく、深い魅力をもつ『食の大地・信州』の入り口として、多くの人に知ってもらいたい」。コロナ自粛で生じた問題は、「リアルイベントの開催が困難になり、4 月以降に企画していたものは、すべてキャンセルまたは延期としました。しかしそれ以上に、飲食業界の方たちと生産者さんたち双方の、経済的困難が大きな問題で、いかに援助できるか支援できるかを当面の課題として模索しています」。

取り組んできたのは、レストランなどの休業にともなう農産物の余剰品買支え。医療関係者支援などの団体への寄付や、生産者をアピールするためのオンラインの販売イベント開催など、縁の下での支えに尽力した。　料理人にも、温かい支援を寄せている。こうした活動が、今後の軽井沢に必ず効いてくるはずである。

Profile：学習院大学卒。大学時代にスペインと出会い、スペインで食文化の研究に取り組む。1989 年、東京に『スペイン料理文化アカデミー』を開設。2016 年には「軽井沢ガストロノミー・プロジェクト」を立ち上げた。
http://bishoku-karuizawa.com

加藤正文

加藤さんが理事長を務める NPO 法人「愛宕山のてっぺんの森を守る会」は、軽井沢「愛宕山のてっぺん」を初めの一歩とし、ナショナル・トラストの理念のもと、軽井沢の豊かな自然を永遠に守り、未来に残すことを目的に活動を行う団体だ。軽井沢に残る豊かな自然を、トラスト活動によって取得し守り育み、自然環境の良循環に寄与することを目指している。

コロナで混乱した今年、人が集まり森を守るイベント活動は自粛を余儀なくされた。一方、コロナ疎開で軽井沢に来た会員たちが、リモートワークや授業をする際に、通信環境が整っていない別荘から、Wifi が繋がる当会の事務所に集い事足りた。これは予想外で、会員の役に立った。自然を守る一義を提唱するなか、軽井沢に集る人たちには相応の利便も不可欠であると感じたことで、コロナ後を考える機会となったと加藤さんは語る。

軽井沢の自然をトラスト活動によって守るには、次世代の子どもたちの参加は欠かせない。環境教育を会の中心に据え、山に入り森を守る活動を体験しながら人が為すべきことを考えていく。また、子どもの未来を築く学校をもつくるべきだとの考えを示す。

Profile：1943 年生まれ。慶應義塾大学卒。6 歳まで軽井沢で暮らす。ビル管理会社経営の後、ビルメンテ業界の理事職など多くに関わる。現在は軽井沢在住。愛宕山を外国人による買収から守るため、当団体を立ち上げた。
https://www.a-trust.or.jp/

タムラエイジ

NY や LA のストリートアートに影響を受けて、犬をポップに描くアーティスト。軽井沢は、ギャラリー深澤での個展開催や、軽井沢プリンスホテルスキー場のレストラン『アゼリア』に 2019 年 11 月壁画を描くなど繋がりが深い。ヴィヴィッドな色遣いで描かれる犬たちだが、作品が醸し出すのは愉しくなれる活き活きした表情ばかり。

明るい作品制作に取り組むタムラさんにも、今年はコロナ自粛が襲いかかった。いかに過ごしたのかと問うと、「4 月 5 月は対外活動が全くできませんでした。しかしその間も、アトリエでオーダーされた “犬” たちをひたすら描いていた。自粛生活で家庭に居る時間が多かったこともあり、犬と暮らしている人が、部屋の模様替えに僕の絵を求めてくれたのかもしれない」と分析した。暗い時世に、タムラ氏の絵は豊かな光を灯してくれるのだろう。

感染症蔓延で生き辛さを感じるが、これからも一層ハッピーな絵を描き続けるし、新たな手法を使いカラフルでぶっ飛ぶような作品を生み出す予定と今後を語ってくれた。

Profile：東京生まれ。国内の大手百貨店、画廊で個展を開くほか、アメリカや東南アジアでも個展開催。
https://eijitamura.com

小嶋洋一郎

軽井沢や隣町の御代田を中心に、ジャズのライブ演奏をするプロギタリストの小嶋さん。軽井沢は音楽に限らず、色々なジャンルのプロたちが移住して暮らす稀有な街でもある。

小嶋さんは、東京で活動後、10 年ほど前に軽井沢に移住した。今年、コロナによる活動自粛で音楽業界は多大な被害を被っている。楽団に所属する演奏家たちは、経験のないアルバイトをするところまで生活が追い詰められたと漏れ聞こえた。小さなスペースで開くライブは、当然のこと観客と接近し飛沫も飛び交い危険極まりないとされた。ライブ自粛生活を小嶋さんは「PC で演奏コラボするなど新しい形も出てきましたが、ジャズに関していえば、やはり互いの演奏に触発されることで生まれる面白さというのがあります。一日も早く普通に楽しんでもらえる日が来るようにと願うばかりです」。

Profile：1949 年名古屋市出身。東京にてフリーランスジャズギタリストとして活動。その後 (株)Vestax 入社。楽器の製造、販売に携わり、DJ 音楽の普及にも参加。その後名古屋に戻り、2010 年軽井沢に移住。軽井沢で、楽器の生の音の良さやジャズの良さを知ってもらおうと活動中。

Karuizawa BASE

軽井沢の今の風景と季節の日々を
ゆったりとお伝えする SNS メディア。

Facebook と Youtube で情報を提供しています。
【軽井沢ベース】で検索！

コロナで考えたこと暮らしを変える
GREEN SEED 軽井沢

コロナが社会にもたらした変化のひとつがリモートワーク。会社のデスクにいなくても仕事ができる。すると、会社に紐づいていた住居地に縛りがなくなる。環境優先で暮らしを変えられる！と移住を考える人が増える。

軽井沢では今年、例年とは違う移住人口の伸びを見せている。暮らしに付加価値を求めて、特に若い世代の流入が目立つ。子どもの教育、生活環境、田舎暮らしの空気感への欲求に加えて、仕事をリモートでこなせた事実が背中を押す。

しかし、軽井沢の冬は寒い。夜は早い。野生動物と出会うこともある。教育環境は整っているか、医療機関は大丈夫か、生活に密着した諸々は住んでから気付くことが多い。こうした住んで気付いて悔やむことがないように、『暮らしを試す』をテーマに住宅を貸すという動きがある。

別荘を借りる概念とは全く違うアプローチで、住居と環境を経験するために「仮暮らしの経験を提供するサービス」が今回紹介する「GREEN SEED 軽井沢」の考え方だ。トリップではなくトライ。

運営するホクシンハウス（本社：長野市）は、高機密、高断熱で換気に優れた住宅建築メーカー。暮らし方や顧客の描く未来像に叶う提案をすべく、環境、住宅、暮らし方のモデルケースを顕在化し、その空間を使う体験を通して将来設計の手助けをしていく。

現在、御代田町に 2 カ所、軽井沢町に 1 カ所、体験型の住宅を持ち宿泊客と交流している。一時の滞在ではない環境を実感するため、あるいは住宅の安心感を体験するための施設と捉える。

「GREEN SEED 軽井沢」は、18 号線追分サンライン入口信号を南へ入って直ぐに位置する。6 棟の趣を異にする家がモデルルームであり宿泊施設として稼働している。目的を持って泊まってみたい家である。

軽井沢暮らし研究所
『GREEN SEED 軽井沢』
軽井沢町追分 134-3　0267-41-0338
https://www.karuizawa-gurashi.com/

家具　木工製品
GRANNE HANTVERK

しなの鉄道踏切の際に佇む「GRANNE HANTVERK　皆木重人家具デザイン製作所」のロゴを冠する一軒家。気になって訪ねてみたいと思ってから、かなり長い時間が過ぎた。HP を探ると、北欧の家具つくりのマイスター資格を取得したご主人が、注文家具を製作しているようだ。

皆木重人さんが、この工房の主だ。東京出身で多摩美卒。一旦は印刷会社に就職するが、ドイツの個人工房で家具製作の基礎を学び、その後にスウェーデンに行き北欧の家具制作技術を学ぶために学校に通う。

卒業後、スウェーデンで会社を設立し 2 年ほど暮らした。家庭の事情で帰国したのち、両親が移住した八ヶ岳にアクセスしやすい北佐久に居を構える。軽井沢生活は 4 年目になった。

皆木さんは、木工家具のみならず、木で造る道具に至るかなりの作品を受注している。依頼を受けたモノを造るにあたり、時間をかけてヒアリングし、デザインを提案、顧客の要望に叶うところまでとことん詰める。そして時に、愉快なアイデアも盛り込む。

また、世界で活躍する料理人が大会で使う什器や、名だたるホテルの式場のツール、家具など、昨今その存在感は圧倒的なものになっている。仏壇も製作する。技術面の才能のみでなく、使われる人や場所をじっくり考える。だからこそ求められるのだろう。

奥様はスウェーデンの学校で一緒に学んだひと。当時の仲間が今、国内外で活躍する。

北欧の生き方に共感して、道具に魅了されて、その使い心地を伝道師のように伝える仕事をしている。信州は森も豊富で、農業や酪農など自然に左右される暮らしを営む人も多い。ナチュラルに暮らして、自然体で仕事をする人。皆木さんが提案する家具や小道具に、これからも期待して拝見していこう。

皆木重人デザイン製作所
GRANNE HANTVERK
電話：0267-31-0318
HP：https://shigetominaki.com

軽井沢ホットスペース
HOTEL KARUIZAWA CROSS

旧軽銀座の真ん中にホテルが誕生した。後ろには聖パウロ教会がある。従前の建物をリノベーションして、一部屋ごとに全く趣きが異なる空間を提供する。

軽井沢というと、BBQ がしたくなる。高原の清涼な空気と高い青空。アウトモール型の当ホテルは、屋根のない宿泊施設として、屋外共有部分で BBQ やナイトシアターも楽しめる。もちろん仕事場としても、緩く過ごすリフレッシュの場としても、利用の仕方は十人十色。CROSS（交わる）をテーマとして、「新と旧、内と外、上と下、人と街、人と人」との交わり（CROSS）を通じて、新しい何かが生まれる場所を目指している。

部屋は 24 部屋。ホテルにはバーも併設され、夜の軽井沢も楽しめる。予約は当ホテル HP（2020 年 12 月初旬予定）かオンライン予約サイト（楽天トラベル、Relux、Yahoo Travel、じゃらん 、等）から。

軽井沢町旧軽井沢
チャートストリート 2F
電話：0267-41-6108

軽井沢書店と軽井沢

2018 年 5 月、本屋の無かった軽井沢に本屋さんができた。Amazon に頼めば、直ぐ手に入るご時世だが、本屋の空間で見たこともないような本や雑誌を手にする喜びは、やはり捨てられない。

軽井沢書店はカフェを併設しており、購入前の本もカフェで読むことができる。書店サービスで試読は増えてきたが、有り難くもあり汚してはならぬと緊張もする。書店の運営母体は蔦屋書店等を展開する CCC。近い将来、軽井沢に愉快な森の本屋さんを創ってくれると期待している。その CCC は、鳥居原交差点近くにシェアオフィスを 2020 年内にオープン予定。隣にはイートンハウスによる子どもたちのアフタースクールも予定されている。様々な試みを以て、近い明日少し先の未来を明るく照らしてほしい。

プラスα　書店の本棚から一冊

季刊地域 No.42（現代農業増刊）「雑木とスギの知られざる値打ち」雑誌「現代農業」の増刊号。“役に立たない木なんてない” がサブタイトル。雑木として名も語られない広葉樹の現状をルポ。木の役割について今一度知ることができる興味深い一冊。いろんなことに目を向けたくなる。

軽井沢町軽井沢 1323
電話：0267-41-1331

自然が豊かであればあるほど、人が生活する環境は厳しくなります。
けれど、せっかく軽井沢で暮らすなら、自然に坑らって閉ざすのではなく、
自然とうまく共生しながら、心地よく暮らしたいもの。
私たちが提案するのは、リゾート地ならではの特性を生かした、
1 年を通して心地よく健康でいられる暮らし方。
自然の豊かさを暮らす愉しみに変える軽井沢らしいライフスタイルと、
厳しい自然環境の下でも快適に暮らせる高性能住宅を提供しています。

軽井沢暮らし研究所　KARUIZAWA LABORATORY

軽井沢暮らし研究所　GREEN SEED 軽井沢（追分サンライン入口交差点の南）　〒389-0115 長野県北佐久郡軽井沢町大字追分字笑坂上 134-3　TEL. 0267-41-0338